

る。松代藩主の「民の苦を救わなければならぬ」という明白な観念のもと、大部分の民衆もまた、そのような藩主の「御恩」に対してひたすら有難がり、感泣するという実情であった。藩主から頂戴した塔婆などを「殊の外有り難がり」建てている農民の姿の中に、藩主への一種宗教的崇拜さえ感じることが出来る。封建道徳がこのような変災の際、ある程度社会の秩序を保つ力となり、為政者には一応善政をしようという意欲を与えたことは看過出来ない。勿論、このような「仁政」が一種のごまかしである場合の多いことは言うまでもない。

次に鎮魂の面で見ると、地震一週間後には村人の発願により施餓鬼法要が営まれている。これは前述の施行による寄付金を投じて行われている。善光寺においても百日間の施餓鬼法要が行われているし、松代藩でも経木三千本を準備して、地元長国寺で施餓鬼法要を行うよう通達している。また、このような異常事態でも、町民は仏生会では寺に花を飾り、端午の節句には仮小屋の下屋に手作りの蓬を挿すことを忘れなかった。

以上のように、復旧のための人道支援は今日のそれと程度の差こそあれ、鎮魂を含めて特段の相違は見られない。いつの世にあっても自助・共助・公助の連携が第一なのであり、我々はそうした先人達の教訓を真摯に検証し、今一度学ぶ必要があるのかもしれない。

「羽田七福いなり」のおかれた土地環境と自然災害の関係

深田伊佐夫

東京都大田区羽田地区には、穴守稲荷をはじめ七ヶ所の稲荷

神社と、番外の多摩川弁天社(玉川羽田辯財天下社)の七社一番外からなる、「羽田七福いなりめぐり」の巡礼コースがある。「羽田七福いなりめぐり」の巡礼は、一九八九年に穴守稲荷神社責任役員・酒井續氏の発案で開始された。

現在、「羽田七福いなり」となった各社は、江戸期から豊漁祈願・海上安全・洪水防止・浪害防止(大田区史事典作成グループ・二〇〇六)などの信仰と祈願を目的に当地域に建立され、現在に至っている。

このような信仰と、祈願が受け継がれてきた背景には、羽田地区が多摩川河口と東京湾に囲まれた立地におかれ、住民たちは水害などの自然災害と向き合いながら、漁業を営んできた歴史のあったことがあげられる(大田区史事典作成グループ・二〇〇四)。

現在は、商売繁盛・学業成就・金運成就など、現世利益を前面に出して庶民の信仰を集め、正月期間限定の御朱印巡礼では地元や京浜地区から、毎年一〇〇〇数百名の参拝者が訪れる(穴守稲荷神社・二〇〇八)。

ところで、筆者は二〇〇三年から多摩川中下流域を中心に、地域の自然災害と民俗信仰の形態との関係について調査・考究をしてきた。その結果、地形・地質・河道・海岸線状況などの土地環境と地域の自然災害経歴の特徴を意識した、信仰による自然災害回避の祈願、災害地形を意識した社寺配置など、宗教的対応のあったことが確認できた(深田・三阪・二〇〇三・二〇〇四・二〇〇五)。

こうした視点で、「羽田七福いなり」をみると、羽田地区

の土地環境の特徴と、信仰の内容、稲荷各社の地理的立地条件との間にも、上述の地域のような土地環境と自然災害の特徴を意識した、信仰的対応や社殿配置があるのではないかと考えた。

そこで、本報では羽田地域の地勢・自然災害史・七福稲荷に受け継がれてきた信仰の内容を調査し、以下三点について考察する。考察内容は、①自然災害への宗教的対応、②中流域での調査との比較、③大田区ハザードマップからみた「羽田七福いなり」についてである。

祭礼行事を媒介とした復興支援のゆくえ

板井 正斉

本研究は、宗教と災害とのかかわりについて「宗教と社会の互恵性」の視点から、その〈適正值〉を求めようとする試みである。発表者の関心は、宗教と災害をテーマにした先行研究が宗教者や宗教教団の活動といった直接的でかかわりの〈強い〉関係性に注目してきたのに対して、ごく一般的な災害・復興支援を続ける市民活動団体の活動から、いわゆる間接的で〈弱い〉関係性にある。そこで、このたびの東日本大震災以降、発表者は岩手県山田町を支援する三重県内の市民活動をアクションリサーチしてきた(拙稿「山田のご縁は支援の動機になるか―神道文化が新たな絆を生み出す可能性」『現代宗教二〇一二』国際宗教研究所、二〇一二)。

本発表では、発災から一年半を経過した最近になって、遠く隔たった岩手山田と伊勢宇治山田とのご縁に、祭礼行事が媒介

となったささやかな復興支援が芽生えようとしている事例を取り上げ、その可能性を考察するための若干の仮説を立ててみたい。

まず、岩手県山田町では、毎年九月に山田八幡宮・大杉神社の例祭として「山田祭」が盛大に行われ、町民のアイデンティティとして息づいている。大震災後、いち早く宮司は「祭りの復活が復興の証」として二〇一一年九月には「山田八幡宮・大杉神社復興祈願例大祭」を挙行した。また山田祭をふたたび実行委員会が二〇一二年三月に町民を対象に実施した「郷土芸能と観光資源に関するアンケート調査」(平成二三年度文化庁地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業)において、山田町の復興において「山田祭」復活の優先度は、「非常に高い」「高い」と答えた方が七三%であった。

次に、三重県伊勢市では、伊勢神宮の二〇年に一度のご遷宮を頂点としながら、お木曳きやお白石持ち行事などを通じて神領民としてのアイデンティティを継承している。一二年前からは伊勢神宮での毎年の神嘗祭にあわせて、神嘗奉祝祭「祭りのまつり」を開催し、全国各地の約二〇団体ものお祭りが伊勢の地に集合して様々な郷土芸能を披露している。

さて、山田祭、神嘗奉祝祭と、それぞれが地域のアイデンティティとして継承しつつも、地理的文化的に「隔たった」両山田の祭礼行事は、当然のことながらこれまで接点を持つことなどなかった。ところが、東日本大震災により、偶発的に伊勢市の市民活動団体が、山田町を支援することとなり、そこからご縁を深めてきた関係者同士が、山田祭の郷土芸能を伊勢の神嘗